

保育所年長児のKSDにおける人物像の特徴

武藤 久枝* 加藤 孝正**

Analysis of Person-figures in Kinetic School Drawings by Six-Year-Old Nursery School Children

MATSUO-MUTO Hisae KATO Takamasa

要 約

本研究の目的は、幼児期の動的学校画（Kinetic School Drawings, KSD）の人物像の特徴に関する実証的知見を得ることである。保育所年長児555名に対して集団でKSDを実施した。そのうち、本人、先生、友達の3者が描かれた136名のKSDについて、1) 一番大きい人物像、2) 自己像の位置、3) 高い位置の人物像、4) 自己像に最も近い人物像、5) 描画水準を分析した。その結果、1) 一番大きい人物像では先生像を描く割合が約半数を占め、2) 自己像の位置では約8割が紙面の中央部以外に小さく描き、3) 紙面の高い位置に描かれたのは先生像と友達像がそれぞれ約4割であり、4) 自己像の最も近くに描かれたのは約7割が友達像であり、5) 活動内容を読み取れる段階の描画水準は約2割にとどまった。性差は認められなかった。

キーワード：動的学校画（KSD）、人物像、年長児

I. 問題

動的学校画（Kinetic School Drawings：以下、KSD）は投映描画法の1種類であり、「先生と友達2名以上、自分を含めて学校で何かしているところを描いて下さい」との教示のもとに実施する。動的家族画（Kinetic Family Drawings：以下、KFD）をもとにProutとPhillips（1974）は学校における子どもの心理的位置づけや友達や先生など集団成員間の相互作用的影響を把握するためにKSDを開発した。KSDは学校に関連する人物（自分、教師、級友）が何かしているところとして本人からみた友人関係や学校状況を把握できる長所があるところから不登校やいじめなどの学校不適応の把握に有効である。

KSDの分析はKFDに準じるとされ、実施にあ

たってはKFDとKSDとの2つを「動的描画システム」として併用することが勧められている（Knoff & Prout, 1985 加藤・神戸訳, 2000）。国内では橋本（2009）などによる臨床的な症例報告が中心であり、分析指標の出現率等に関する実証的知見に乏しい現状である。数少ないKSDの実証的研究において、田中（2007, 2012）は小中学生を対象としたKSDの分析指標として絵の活動レベル、人物像の身体特徴、人物像の大きさや人数、人物像間の距離、スタイル（区分化、包囲など）を用いている。また、代表的な分析指標の中でとりわけ人物像の特徴を中心に挙げた鈴木他（2003）では、小学校5年生と中学2年生を対象として児童生徒の自己効力感と教師との関係を把握するためにKSDの評定用紙を試作している。その結果、人物像の大きさは小学校5年生の方が中学2年生よりも自己像に比して大きな教師像を描く傾向があること、続報の鈴木他（2004）における人物像間の距離の分析では、自己像の最も

* 中部大学現代教育学部幼児教育学科

** 同朋大学

近くには友達像が描かれる傾向があることを報告している。人物像の相対的大きさに関するこれらの知見に対して、田中（2007）は人物像の絶対的大きさと相対的大きさの両者の特徴を分析する目的で小学校3年生から中学3年生までのKSDの自己像、先生像、友達像の大きさを測定して学年ごとに比較している。その結果、各人物像の絶対的大きさは年齢とともに大きくなること、また、相対的な大きさの分析では小学校3年生から中学1年生までは先生像を最も大きく描き、自己像と友達像をほぼ同じ大きさに描いていたのが、中学3年生になると3者をほぼ同じ大きさに描くようになることを明らかにしている。人物像間の距離についてKSDでは重要な人物の隣に自己像を描くのはその人物に好意を持ち、近づきたいとの表れとされているし、KFDでは人物像間の距離が近い場合はその人物に対する同一視や支持・受容されたい欲求の表れであり、遠い場合は孤立感あるいは拒絶感の表れであると臨床的に解釈されている（Knoff & Prout, 1985 加藤・神戸訳, 2000）。実証的研究において、田中（2012）は不適応の兆候のある児童生徒の描くKSDの人物像は他の児童生徒の描く人物像よりも小さいこと、人物像間の距離には不適応の兆候による差が認められないことを明らかにしている。また、紙面の空間の使い方は臨床的解釈では注目され、重要な人物は紙面の高い位置に描かれる傾向にあることをKFD（Burns & Kaufman, 1972）においてもKSD（Knoff & Prout, 1985 加藤・神戸訳, 2000）においても指摘されてきたが、実証的研究においてはまだ、検証されていないようである。

以上のKSDに関する実証的研究においては対象が小学生から大学生までに関するものであり、幼児期のKSD研究は症例報告も実証的研究も少なく、最近になって取り組まれ始めたばかりである（松尾・加藤, 2013, 2014, 2015）。幼児を対象としたKSDでは保育所や幼稚園などの保育場面を描くことになるが、対象児の適応状況や集団力動を把握できることから臨床的に有意義と考えられる。

Knoff & Prout（1985 加藤・神戸訳, 2000）によれば幼児のKSDを分析する指標として、①人物像の描出（友達の数、先生の数）②描画順位③活動内容④シンボル（花、木草、家、ハート、印）⑤

スタイル（包囲、鳥瞰図、透視画、区分化、エッジング）⑥自己像の位置⑦一番大きい人物像⑧高い位置の人物像⑨自己像に最も近い人物像⑩描画水準などが挙げられている。国内において子どもの描画の発達過程に基づいた実証的研究が少ない現状であること、また、近年、子どもの描画の発達が遅くなっているとの指摘（武藤, 2014）から、これらの分析指標の出現率等に関する実証的資料を得て、その妥当性を検討し、代表的指標を確立させる必要がある。

以上から、われわれは幼児期のKSDの特徴に関する実証的知見を得ることを目的として年長児のKSD研究（松尾・加藤, 2013, 2014, 2015）に取り組み、いくつかの知見を得てきた。現在までに明らかになったことは男児の描画順位では自己像、友達像、先生像の順で描かれることが多いのに対して、女児では自己像、先生像、友達像の順に描かれることが多いこと、戸外スポーツに関する描画内容は男児に多いこと、包囲や鳥瞰図などのスタイルは男児に多いこと、シンボルは女児に多いことなどの性差が認められた（松尾・加藤, 2015）。本研究では残りの指標である①一番大きい人物像②自己像の位置③高い位置の人物像④自己像に最も近い人物像⑤描画水準を取り上げて、性別の出現率を報告することとする。

Ⅱ. 目的

本研究は、年長児のKSDにおける①一番大きい人物像②自己像の位置③高い位置の人物像④自己像に最も近い人物像⑤描画水準に焦点を当てて解明することを目的とする。

Ⅲ. 方法

1. 実施方法

(1) 用紙他

A4サイズの画用紙とBの鉛筆（消しゴム付き）。

(2) 実施園に対する説明

実施の約2ヶ月前に実施園の園長全員に対して実施要領を説明した。

(3) 手続き

①教示等：KSDの教示（Knoff&Prout, 加藤・神戸訳, 2000）をもとにして筆者らが幼児向けに修正した内容にしたがって保育所年長クラスにおいて、クラス担任が集団または個別で実施した。教示は「保育園でお友達や先生や自分も入れて何かしているところを描いて下さい」である。

②実施手続き：描画後は描かれた人物像の横に描画順位を担任に記入するように求めた。用紙裏面には人物像の間柄（本人、友達、先生）と描画順位と何をしているところかについて本人または担任が記入するように求めた。

(4) 説明と同意

描いたKSDを担当以外にみせても良い場合は画用紙の裏面に○を、拒否する場合には×を書くことによって子ども本人の同意を得た。研究の趣旨と手順の説明文を園内に掲示して保護者の了解を得た。

2. 対象と実施時期

2つの実施時期（Ⅰ期：2012年8月～9月、保育所9ヵ所、Ⅱ期：2013年11月～2月、保育所10ヵ所）に分けて保育所の年長児を対象に実施した。

3. 収集資料と分析資料

(1) 収集資料

保育所年長児クラスにおいてⅠ期249名（男児123名、女児126名）、Ⅱ期306名（男児145名、女児154名、性別不明7名）合計555名のKSDを収集した。性別の内訳は男児268名（48.3%）、女児280名（50.4%）、性別不明7名（1.3%）であった。

(2) 分析資料

収集資料のうち、人物像の間柄不明や人物が描かれてない場合などを除き本人と友達、先生の3者が描かれた136名を本研究の分析対象とした。

4. 分析項目

Knoff & Prout (1985, 加藤・神戸訳, 2000) を参考に分析項目として、以下の10項目を設定した。

①人物像の描出（自己像、友達像の人数、先生像の人数）②描画順位③活動内容④シンボル（花、木草、

家、ハート、印）⑤スタイル（包囲、鳥瞰図、透視画、区分化、エッジング）⑥自己像の位置⑦一番大きい人物像⑧高い位置の人物像⑨自己像に最も近い人物像⑩描画水準である。

このうち本研究では、①一番大きい人物像②自己像の位置③高い位置の人物像④自己像に最も近い人物像⑤描画水準を取り上げる。

(1) 人物像の人数

用紙裏面に記入された間柄をもとに、描かれた人物の合計人数を集計した。次に、友達像の人数と先生像の人数を求めた。

(2) 人物像の分析

①一番大きい人物像

それぞれの人物像の身長をミリ単位で測定した。紙面に描かれた複数の人物像の中で相対的な大きさが最も大きい人物像を求め一番大きい人物像とした。

②自己像の位置

紙面の空間図式について高橋他（2010）、武藤（2011）にしたがって、KSDの描かれた用紙を上下左右に空間を4分割して、それぞれ、上方左、上方右、下方左、下方右とした。次に、紙面中央8分の1の大きさを中央部とした。以上で紙面を5分割した。自己像が中央部に描かれた場合とそれ以外、判定不能の3通りに分類した。

③高い位置の人物像

各人物像の頭の高さを比較して頭頂部が紙面の一番上部にある人物像を高い位置の人物像とした。円形のトラック競技場や鳥瞰図のように描画の上部が判断できない場合は判定不能とした。

④自己像に最も近い人物像

自己像とその他の人物像の距離をミリ単位で測定した。自己像の最も近くにいる人物像を自己像に最も近い人物像とした。

(3) 描画水準

山尾・田中（2004）、武藤・加藤（2013）を参考に本研究ではKSDの描画水準を以下の水準A、Bの2段階に設定した。水準Aは活動内容が絵から読み取れない段階、水準Bは用紙の裏面等に記述してある活動内容が絵から読み取れる段階である。分

析資料を描画水準 A、B に分類した。

5. 統計的処理方法

(1) 単純集計

すべての分析項目についてその出現した人数を集計した。また、描かれた人物の人数、友達の人数、先生の人数について平均を求めた。

(2) 性別の比較

各項目の出現について性別にクロス集計を行って、セル内5以上出現した場合に χ^2 検定を行った。分析には、SPSS (Statistical Package for the Social Science) 解析ソフト (第21版) を用いた。

IV. 結果と考察

1. 分析対象の性別と月齢

分析対象136名の平均月齢は74.5ヶ月 ($SD=4.9$)、性別は男児66名 (48.5%)、女児70名 (51.5%) であった。男児の平均月齢 (74.9ヶ月、 $SD=5.0$) と女児の平均月齢 (74.2ヶ月、 $SD=4.7$) との間で有意差は認められなかった。

対象児の月齢を武藤・加藤(2013)にしたがって「59～65ヶ月」「66～71ヶ月」「72～77ヶ月」「78～83ヶ月」に区分してクロス集計をした。その結果、出現率は「72～77ヶ月」(51名、37.4%)、「78～83ヶ月」(44名、32.4%)、「66～71ヶ月」(36名、26.5%)「59～65ヶ月」(5名、3.7%)の順に高かった。

2. 人物像の人数

(1) 合計人数

本人を含めた人物像の合計人数の平均は5.9名 ($SD=4.2$) であり、その内訳は3名 (37名: 27.2%)、4名 (34名: 25.0%)、5名 (18名: 13.2%)、6名 (15名: 11.0%)、7名以上 (32名、23.6%) であった。合計人数の平均について、男児 (6.0

名、 $SD=4.1$) と女児 (5.7名、 $SD=4.3$) との間でt検定を行ったが有意差は認められなかった。

(2) 友達の人数

友達の人数は平均3.8名 ($SD=4.1$) であった。その内訳は1名と2名とが同数 (37名: 27.2%) であり、以下、3名 (17名: 12.5%)、4名 (15名: 11.0%) の順であった。友達像を20名以上 (20名: 2名、1.5%、21名: 1名、0.7%) 描いた者もいた。友達の人数の平均について男児 (3.9名、 $SD=3.8$) と女児 (3.6名、 $SD=4.3$) との間でt検定を行ったが有意差は認められなかった。

(3) 先生の人数

先生の人数は平均1.1名 ($SD=0.3$) であり、大多数 (128名、94.1%) の者が先生像を1名しか描かなかった。4名の先生像を描いた者は1名 (0.7%)、2名の先生像を描いた者は7名 (5.1%) であった。先生の人数の平均について男児 (1.1名、 $SD=0.43$) と女児 (1.0名、 $SD=0.20$) との間でt検定を行ったが有意差は認められなかった。

3. 人物像の分析

(1) 一番大きい人物像

男女ともに約半数の者が先生像 (70名、51.5%) を一番大きく描いた (表1)。友達像 (35名、25.7%) と自己像 (31名、22.8%) を一番大きく描いた者はほぼ同数であり、よく似た出現率を示した。女児では友達像を大きく描いた者 (20名、28.6%) が自己像を大きく描いた者 (15名、21.4%) を上回っていた。これに対して、男児では自己像を大きく描いた者 (16名、24.2%) が友達像を大きく描いた者 (15名、22.7%) を上回っていた。一番大きい人物像について性別に検討した結果、有意差は認められなかった。

鈴木他 (2004) は小学校5年生で一番大きく描かれたのは先生像 (64.6%) であり、以下、自己像

表1 一番大きい人物像

	男児 (%)		女児 (%)		合計 (%)	
自己像	16	(24.2)	15	(21.4)	31	(22.8)
友達像	15	(22.7)	20	(28.6)	35	(25.7)
先生像	35	(53.1)	35	(50.0)	70	(51.5)
合計	66	(48.5)	70	(51.5)	136	(100.0)



図1 自己像を紙面中央に大きく描いた例（5歳11ヶ月、女兒）

（24.2%）、友達像（11.1%）の順と報告している。先生像が第1位であった本研究結果は鈴木他（2004）とほぼ一致していたが、本研究では自己像と友達像がよく似た出現率であったのに対して、鈴木他（2004）では自己像を一番大きく描く割合が高く友達像の約2倍を示した点で異なっていた。また、幼児の自己中心性の表れとして自己像を大きく描くとの知見（加藤, 1999）は本研究結果とは一致しなかった。KFDにおける人物像の大きさは本人からみた家族内力動を表す指標（武藤, 2011）として考えられているけれども、本研究の対象児のKSDでは幼児の自己中心性や家庭内力動の反映よりも現実の身体的特徴を反映している可能性が高いと考えられる。

（2）自己像の位置

自己像を紙面の周辺に小さく描いた場合が約8割（106名、77.9%）を占めた（表2）。第2位は紙面中央に小さく描いた場合（20名14.9%）であり、第3位は紙面中央に大きく描いた場合（10名、7.4%）

であった。自己像の位置について性別に検討した結果、有意差は認められなかった。

図1は5歳11ヶ月の女兒による自己像を大きく中央に描いた例である。活動内容は「ハローウィンパーティをしているところ」である。紙面中央に自己像が大きく描画順位第2位に描かれている。自己像の最も近くには右隣に友達像1が描かれている。右肩上部には消しゴムで消したような跡がある。この友達像1は紙面の最も高い位置に描かれていること、描画順位第1位であること、また、自己像の最も近くに描かれていることから、本人にとって重要な人物とみられる。自己像の左隣には友達像2が描画順位第3位に描かれている。先生像は自己像から最も遠く、そして紙面の左端に描画順位第4位に描かれている。

図式期では自己中心性の表れとして自己像は紙面中央に描かれる特徴があるとの知見（加藤, 1999）に反して本研究の対象では自己像は紙面中央に描かれることが少なかった。

表2 自己像の位置

	男児	(%)	女児	(%)	合計	(%)
紙面中央に大きく	3	(4.5)	7	(10.0)	10	(7.4)
紙面中央に小さく	9	(13.6)	11	(15.7)	20	(14.9)
いずれでもない	54	(81.8)	52	(74.3)	106	(77.9)
合計	66	(48.5)	70	(51.5)	136	(100.0)



図2 先生像を紙面の高い位置に描いた例（6歳9ヶ月、男児）

(3) 高い位置の人物像

友達像と先生像を紙面の高い位置に描いた者が第1位で同数（54名、39.7%）であった（表3）。第3位は自己像（19名、14.0%）を紙面の高い位置に描いた場合であり、その出現率は友達像や先生像に比べて半分以下と低値であった。判断不能の9名を除いて高い位置に描かれた人物像の出現率について性別の検討を行ったが有意差は認められなかった。

自己像が紙面の高い位置に描かれた場合は支配あるいは自己への注意を引こうとしている表れであり、友達像や先生像が紙面の高い位置に描かれた場合はその人物の権力を認めているとされている（Knoff & Prout, 1985, 加藤・神戸訳, 2000）。紙面の高い位置に描かれた人物像は本人にとって重要な人物や集団内での影響力の強い人物を表しているとの臨床的解釈はあるもののそれを実証的に検証した知見は見当たらないようである。本研究では先生像

と友達像が同数であったことから本研究の対象は先生を支配的にとらえている可能性は低いのではなかろうか。

その中で先生像を高い位置に大きく描いている例として、図2は6歳9ヶ月の男児による「おばけごっこしているところ」である。紙面を上下左右にほぼ4区分した線が引かれている。紙面上部右には先生像が第6位に大きく高い位置に描かれ、紙面左下には自己像が描画順位第2位に描かれている。自己像の最も近くには友達像3が描画順位第4位に描かれ、その隣の友達像1は紙面中央に描画順位第1位に描かれ、先生像の下には描画順位第3位の友達像2と描画順位第5位の友達像4とが描かれている。紙面を4区分して線を引くことによって人物像の位置を明確に分けて、自己像のグループ（自己像、友達像1、友達像3）と友達像2のグループ（友達像2、友達像4）を別々のグループとして表して、そして先生像も別

表3 高い位置の人物像

	男児		女児		合計	
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
自己像	11	(16.8)	8	(11.4)	19	(14.0)
友達像	23	(34.8)	31	(44.3)	54	(39.7)
先生像	23	(34.8)	31	(44.3)	54	(39.7)
判定不能	9	(13.6)	0	0.0	9	(6.6)
合計	66	(48.5)	70	(51.5)	136	(100.0)



図3 友達像を大きく自己像の最も近くに描いた例（6歳9ヶ月、男児）

の存在として表しているようである。包囲と区分化の例でもある。

(4) 自己像に最も近い人物像

約7割（100名、73.5％）の者が自己像の最も近くに友達像を描いた。この特徴はとりわけ女兒に顕著であり、約8割（81.4％）が自己像の近くに友達像を描いている。これに対して男児では自己像の近くに友達像を描いた者は比較的低率（43名、65.1％）であったものの先生像（18名、27.3％）の倍以上の出現率を示した。判定不能の5名を除いた131名で性別の出現を比較したと有意差は認められなかった。

図3は6歳9ヶ月男児による友達像を自己像の近くに大きく描いた例である。紙面中央に自己像が描画順位第2位に小さく描かれている。自己像の最も近くには右隣に友達像1が描画順位第1位に描かれている。自己像の左側には描画順位第3位の友達像2が高い位置に描かれている。自己像の両側に友達像1と友達像2が描かれ、その中間に自己像が位置

している。この3名がブランコによって個別にそれぞれ包囲されて、さらにブランコの柵によってこの3名とそれ以外の先生像と友達像3を区分化して描かれていることから、自己像、友達像1、友達像2の合計3名の親密度が高いことを表しているようである。先生像はブランコの柵の外側に紙面左端の下方に位置し「すごいね」と褒めて見守っているように描かれている。紙面の右端下方には友達像3が縄跳びをしている場面が描画順位5位に描かれているが、自己像達と違う遊びをしている。

本研究の結果は、自己像の最も近くに描かれるのは友達像が多いとの鈴木他（2004）、田中（2012）の結果と一致した。これらは小学生を対象とした知見であるが、この傾向は既に幼児期から始まっているのかもしれない。田中（2012）は要求的親密性得点と人物間の距離との関連を分析して、友達像との距離と親密さとは小学校低学年では関連が高かったが、高学年になると関連が低下していると報告し、人物像間の距離が近いことはその人物に肯定的な感

表4 自己像に最も近い人物像

	男児		女児		合計	
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
友達像	43	(65.1)	57	(81.4)	100	(73.5)
先生像	18	(27.3)	13	(18.6)	31	(22.8)
判定不能	5	(7.6)	0	0.0	5	(3.7)
合計	66	(48.5)	70	(51.5)	136	(100.0)

表5 描画水準

	数字は人数 (%)					
	男児	(%)	女児	(%)	合計	(%)
水準 A	53	(80.3)	54	(77.1)	107	(78.7)
水準 B	13	(19.7)	16	(22.9)	29	(21.3)
合計	66	(48.5)	70	(51.5)	136	(100.0)

情を持っていて近づきたいとの感情の表れという従来の見解 (Knoff & Prout, 1985, 加藤・神戸訳, 2000) を見直す必要を示唆している。現実の人間関係と描画との関連を本研究では明らかに出来なかったけれども幼児の場合も今後、このような検討が必要ではなかろうか。

4. 描画水準

描画から活動内容が読み取れない段階の水準 A (107名、78.7%) の出現率の方が、描画から活動内容が読み取れる段階の水準 B (29名、21.3%) よりも高かった (表5)。描画水準について性別の検討を行ったが有意差は認められなかった。本研究の KSD では描画内容が読み取れない段階が約8割を占めているが、この割合は似たような集団である保育所年長児を対象とした武藤・加藤 (2013) の KFD の描画水準における活動内容が読み取れない段階 (62.5%) を上回った結果となった。KFD においては女児の描画水準は男児よりも高いとの知見が幼稚園児と小学生を対象とした検討 (山尾・田中, 2004) や年長児を対象としたわれわれの報告 (武藤・加藤, 2013) から得られているが KSD の描画水準を分析した本研究では性差は認められなかった。この要因として、KSD であることが影響して KFD のように幼児の描画水準を十分反映できずに異なる結果となったのかもしれない。また、本研究において設定した描画水準の基準は、人物像の動的要素の有無と絵からそれら動的要素を読み取れるかどうかにあった。動的要素を読み取る妥当性を客観的に表すことが難しく、この点の解決が今後の課題である。

V. 今後の課題

今回の分析指標である人物像の特徴では性差は認められなかった。今回の分析は人物像の形式的な面

からの分析であったことが影響しているのかもしれない。この点については例数の蓄積と今後の精査が必要である。

また、年長児が KSD を描くことは意外に難しく 555 名中 136 名しか描けなかった。この要因として、友達像しか描かれていない描画や自己像しか描かれていない描画が多かったこと、先生像と友達像と自己像の3者が揃った描画は少なかったこと、描画順位や間柄を書かれていない描画も多かったことなどが挙げられる。最も身近な人物である家族を描く KFD に比べて、保育所の場面や友達や先生をイメージして描画に表現することは年齢的にまだ、難しいのかもしれない。小中学生に KSD と質問紙とを集団で実施した田中 (2011) では中学生の回答は約8割以上を超えているのに比べて小学生での KSD の回収は約半数と低く、小学生においても KSD を描くこと自体が難しいのかもしれない。幼児に対する実施方法を検討することが今後の課題である。

本研究の一部は、第24回日本描画テスト・描画療学会においてその一部を発表しました。

謝辞

描画の収集にあたって、ご協力いただきました保育所の子ども達と保護者の皆様方、先生方、関係機関に深謝致します。

文献

- 1) Prout H. T. & Phillips, P. D. (1974): A clinical note: The Kinetic School Drawing. *Psychology in the Schools*: 11: 303-306.
- 2) Knoff, H. M., & Prout, H. T. (1985): *Kinetic drawing system for family and school: A Handbook*. Los Angeles, CA: Western Psychological Services (加藤孝正他訳、学校画・家族画ハンドブック、金剛出版、

- 2000)
- 3) 橋本秀美 (2009): スクールカウンセリングに活かす描画法、高橋依子監修、金子書房
 - 4) 田中志帆 (2007): 小・中学生が描く動的学校画の発達の变化、心理臨床学研究、25(2): 152-163
 - 5) 田中志帆 (2012): 教育臨床アセスメントとしての動的学校画、風間書房
 - 6) 鈴木眞雄・山田一郎・松田惺 (2003): 動的学校画評定用紙の作成とその評価のための日本と韓国の比較、愛知教育大学研究報告、52: 81-89
 - 7) 鈴木眞雄・山田一郎・岩田直治 (2004): 動的学校画における人物像の相対的大きさと人物像間の距離の大小についての分析、愛知教育大学研究報告、53: 1-5
 - 8) Burns, R. C. & Kaufman, S. H. (1972): Actions Styles and Symbols in Kinetic Family Drawings (K-F-D): Bruner/Mazel. New York. (加藤孝正他訳、子どもの家族画診断、黎明書房、1975)
 - 9) 松尾久枝・加藤孝正 (2013): 保育所年長児のKSDの分析、日本描画テスト・描画療法学会第23回大会抄録集: 54
 - 10) 松尾久枝・加藤孝正 (2014): 保育所年長児のKSDの分析 (第2報)、日本描画テスト・描画療法学会第24回大会抄録集: 44
 - 11) 松尾久枝・加藤孝正 (2015): 保育所年長児のKSDのシンボルとスタイルに関する分析、臨床描画研究、31: 印刷中
 - 12) 武藤 (松尾) 久枝 (2014): 第7章、現場実践における知能検査の意味、児童心理学の進歩2014年版、金子書房: 142-166.
 - 13) 高橋雅春・高橋依子 (2010): 樹木画テスト、北大路書房
 - 14) 武藤久枝 (2011): 第3部4章、動的家族画、心理検査の実施の初歩 (願興寺礼子・吉住隆弘編)、ナカニシヤ出版: 89-98
 - 15) 山尾沙耶香・田中吉資 (2004): 幼稚園5歳児及び小学1年生の動的家族画—発達と家族への思い—、香川大学教育実践総合研究、9: 101-114
 - 16) 武藤久枝・加藤孝正 (2013): 保育所年長児のKFDにおける活動内容の分析、中部大学現代教育学部紀要、5: 39-47
 - 17) 加藤孝正 (1999): 動的家族画 (KFD) の発達、臨床描画研究、14: 30-42
 - 18) 田中志帆 (2011): 荒れている学級の動的学校画、青山学院女子短期大学紀要、65: 125-149

受付日 2015年 9月30日

受理日 2015年10月27日

Abstract

The purpose of this study was to clarify the characteristics of KSD by 6-year-old nursery school children. The KSD was carried out for 555 6-year-old children at nursery school in 2012-13. Three indices were used for the assessment of KSD: 1) Size of drawing person-figures (self, friends, teacher), 2) Location of drawing figures in paper, and 3) KSD drawing level. One hundred thirty-six KSD (66 boys, 70 girls) were analyzed, and incomplete drawings.

The results were as follows: 1) The mean age of children was 74.5 months. 2) The drawing teacher-figures were largest in 70 children (51.5%). 3) The drawing friend-figures were located near the self-figures in 100 children (73.5%). 4) KSD were divided into 2 classes. It was impossible to interpret actions from drawings in 78.7% of the KSD. The 6-year-old children drew friend-figures near self-figures, and drew teacher-figures largest.

Keywords: kinetic school drawings, nursery school children, person-figures